

氏 名 尾 鍋 智 子

学位（専攻分野） 博士(学術)

学 位 記 番 号 総研大甲第543号

学位授与の日付 平成13年9月28日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻

学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 絶対透明の探究：遠藤高環著『写法新術』の研究

論 文 審 査 委 員 主 査 助 教 授 早 川 聞 多
助 教 授 栗 山 茂 久
助 教 授 稲 賀 繁 美
教 授 橋 本 毅 彦 (東京大学)
客員教授 山 田 慶 兒 (龍谷大学)

博士学位申請論文要旨

本論文は、加賀藩士遠藤高環（1784-1864）が著した『写法新術』（1825-1850）について論じたものである。『写法新術』は江戸後期の視覚変革をもたらしたひとつの結実といえよう。その独創的な内容は既存概念への批判精神に溢れ、視覚についての論考は哲学的に洗練された議論を展開した興味深いものである。

一般に 1760 年頃から始まるとされる江戸期の視覚文化の変革期に関しては近年美術史の分野においての研究が盛んだ。これらは概して蘭学や博物学との関係から、絵画表現など表象文化論を基礎に展開している。いわば視覚を用いた外向きのヴィジュアルリティ論といえる。ここで残された問題のひとつは、内へと目を向けたヴィジュアルリティ論、つまりこの時期の知覚認知論としての視覚そのものに関する研究だが、これらについての研究はごく数少ない。

19 世紀前半は、このような物質、技術面と較べて遅れた内向きビジュアルリティの理論受容の過渡期にあたる。ちょうどこの頃、1825 年から 1850 年頃にかけて、遠藤は『写法新術』を著わし、未だ解明の進んでいなかったビジュアルリティの主要なふたつの理論問題、透視図法の理論と視覚理論に同時に取り組んだ。しかも、これはこのころ進行中の蘭学者の、光学書への試みのように訳述書でもない。むしろ理論そのものを可能なかぎり自力で考案しようとする試みだった。遠藤はそのふたつを理論的に整理し、さらに体系として総合的に結びつけようとする。きわめて野心的試みであった。

このような遠藤の個人的試みを、遠藤の生きた時代に位置づける時、彼が視覚理論と画法をあわせて体系づけようとした根拠もより明確になる。遠藤の写法論と視覚論とがなぜ遠藤の思想の中でさらに倫理性をも帯びて深く結びついたのかは、この視覚革命がそのイデオロギーのひとつとした透明性、透きとおりを追求するビジュアルリティという一点にそれらすべてが収斂したからであった。つまり遠藤のビジュアルリティ探求は、理想的透明状態を求めつつも、その探求自体に哲学的倫理的価値を認める、絶対的透明性を求めるものであったといえよう。

まず遠藤が関った科学活動では、実証的態度からくるとき澄まされた知覚の透明性の論理がみられた。次に写法論では、透かし見る西洋透視図法や望遠鏡を通した視覚を理想として自分の三つの図法を理論的に整理しようとする試み、視覚論ではその写法と透明な視覚を体系的に結びつけようとする。最後に、観察の手段としての知覚の透明度を哲学的に追求することから、その認知論は倫理としての透明性へと行き着いたのだった。

遠藤の視覚論について、その基礎は、大きくは西洋光学受容以前の日本の視覚論に共通点を見出せるが、また一方独自色も強い。心積法を批判的に展開することによって、遠藤がどのように普通の見方の盲点を指摘しているかを心積法の議論に見る。最後に、さまざまな見方の多様性との比較の観点から、遠藤の見方の特徴を明らかにすることを試みた。

以上のような遠藤の思想は、江戸時代にみられた実用主義の、大きな認識論の流れの中にあつた。¹ その特徴は 1) 図の重視、2) 新たな透明な視覚を追求する、3) 実用と公共性の意識の高揚がある。杉田玄白ら『解体新書』の翻訳グループも原本の図の精妙さに説得され、西洋医学の優位を感じとり、言葉の翻訳へと向かったのであつた。その結果、知覚認識を無意識に行えば「慢性的誤解」²である「旧染」をいつも付与して見ている。だから伝統からくるくもりを払拭した改革をめざすため、意識的な認識によってあらたなる視覚を獲得すると主張していたのだった。

遠藤の初期の思想書『三道唯一貫通』にも同様の実用と公共心を重視する思想が現れている。さらにこの実用主義的傾向は、質素素朴なありのままをよしとし、メタファーを嫌悪した。なぜならそれは華美でありコミュニケーションを阻害する「くもり」と見なされたのであつた。この華美で退廃的という批判は気韻生動を旨とする画家たちにもつばらむけられた。また華美を取り

除いたそのままをよしとする思想は、遠藤が漂流民の聞き書きを、口語のままに書き写そうと実践した事実にもあらわれている。

『写法新術』の眼目である観積法は今で言う透視画法を直感的に志向したとはいえ、それと同じではない。理論的には観積法は遠藤にとって二次元と三次元を同時に表す、つまりその中に視覚的知覚と触覚的知覚をあわせもった理想的融合を果たした写法であった。それを現実に図写するのは難しかった。だがむしろ、その時に遠藤が当時の図の読者とコミュニケーションを図ろうとする態度が表れていて、その遠藤のズレを避けようとする態度が我々には興味深い。

遠藤の写法論はたしかに透視画法の技術的解説としては成功していたとはいいがたい。だが、その写すことと見ることに関する哲学的論考は江戸時代後期の認知論を担う希有な作品となっている。その論考の方法論そのものが、学問の方法論における透明性の可能性をもとめて、透明をイデオロギーとして標榜していたのである。

遠藤のこのような透明な写実への志を忠実に反映するかのように、遠藤が真写をめざした結実は、絵画ではなく、後の加賀藩の、写真術の発展へと繋がっていった。

¹ Kuriyama Shigehisa, "Between Mind and Eye: Japanese Anatomy in the Eighteenth Century" in Charles Leslie & Allan Young, Paths to Asian Medical Knowledge, Berkeley, University of California Press, 1992, p.p.21-43: 40.

² Kuriyama 同上、23頁。

論文の審査結果の要旨

本論文は加賀藩士遠藤高環(1784-1864)が著した図法書『写法新術』(1825-1850)について論じたものである。近世日本の視覚文化は長崎経由でもたらされた西洋の様ざまな図画や器物の刺戟によって、十八世紀半ば頃から大きな変化をみせた。その変革の研究は近年おもに美術史の分野において、蘭学や博物学との関係から表象文化論として進んでいるが、そうした変革を内的な視覚認識の変革として論じた研究は極めて少ない。高環の『写法新術』も西洋の画法や図法に大きな刺戟を受けて著された視覚に関する理論書であるが、本書はユークリッド幾何学の演繹法を厳密に応用した当時としては唯一無二といえるものであり、まことに独創的な著作である。

本書は数少ない写本で伝わるだけでほとんど世に知られておらず、従ってその内容や意味を論じた先行研究もないに等しかった。本論文はその難解な内容を丹念に読み解くと共に、その内に透視図法の理論と視覚理論を結び付けた高環の独創性を見出し、その意味を日本の科学史および文化史の流れの中に位置づけようとしたものである。

論文の概要は、第一章で先ず江戸時代の視覚の変革期における『写法新術』の歴史的な位置づけを行い、次に第二章で遠藤高環の来歴と行跡およびその学問的背景を明らかにし、第三章と第四章で『写法新術』そのものの詳しい分析を行っている。第三章では『写法新術』の図法書としての内容を解明し、高環が分類し命名した三つの図法、「心積法」「物積法」「観積法」の相違とその意味合を分析して、西洋の透視図法に相当する「観積法」が最も正しい図法、すなわち「真写」であるとする高環の主張を明らかにしている。そして第四章では『写法新術』の視覚理論書としての内容を解明し、高環が図法理論と視覚理論を結び付けて、正しい視覚を得るための「真写」の法を知ることが、「私心」を離れて「公」に通じ、広く公共の「実用」に供し得るという意味合で、同時に極めて倫理的な問題でもあるとする高環の独創的な思想を明らかにしている。従って高環は「真写」の法によらぬ伝統的なあらゆる画法・図法を、術学趣味や虚飾に馴染んだ「私心」に基づく「心積法」と見做し、透明無垢な「心」を曇らせる画法・図法として徹底的に排除する。そして結語において、高環は透視図法の論究から理論的に「絶対透明」なる視覚を得ようとした、当時としては稀有な科学者であり哲学者でもあったと申請者は結論づけている。

このように、ほとんど無名ともいっていい江戸時代後期の測量士遠藤高環なる人物の著作を研究対象として選び、その複雑な理論を独力で読み解くと共に、図法と視覚を結び付けるという高環の孤高なる哲学的思索の跡を解明した本論文は、日本科学史のみならず日本文化史において新生面を開いたものとして高く評価される。

なお、本論文には論文作成上の技術面において資料の引用法や用語の選択に不統一と不備が散見され、分析面において西洋の数学的図法との綿密な比較検討が不十分であるという欠点はあるが、それを補って余りある斬新さと示唆に富む内容によって、学位に十分値するものと思われる。